

論文

「生活場面面接」は「Life Space Interview」なのか？  
—用語としての検討—

安藤 健一

日本福祉大学 福祉経営学部

Is the “Seikatsu Bamen Mensetsu” the “Life Space Interview”?  
—Consideration as a term—

Kenichi ANDO

Faculty of Healthcare Management, Nihon Fukushi University

Keywords : 生活場面面接, Life Space Interview, レドル, レヴィン, 生活空間

要旨

本研究は、レドルの Life Space Interview の訳語が「生活場面面接」で妥当か検討するため、その用語（訳語）と説明から検証する研究である。1990年代まで国内では生活場面面接に関する研究論文がない。その実態のなかで“Life Space Interview”の用語が入っている限られた国内文献を調査対象としている。その調査研究の結果、レヴィンの「場の理論」における「生活空間」との関連等から「生活空間面接」が妥当と結論づけた。また、辞典等では、その説明も十分でないことが判明した。レヴィンとの関連を明確にしたことが本研究の意義であるが、その理論的理解は今回の資料だけでは限界がある。場の理論を踏まえた生活場面面接の研究が課題である。

1. はじめに

日本において、久保（1991）が「構造化されていない面接——生活場面面接の視点から」で「生活場面面接」を提唱して以来、生活場面面接は、心理学分野や社会福祉学分野において専門用語として使用されている。CiNii（NII 学術情報ナビゲータ）で「生活場面面接」を検索すると、論文として69件が検索結果として示され、そのうちタイトルに「生活場面面接」が含まれるものは59件になっている（2023年8月31日現在）。

生活場面面接は、久保（1991）が提唱した時点から、Life Space Interview を基礎にしていることが示されて

いる。その Life Space Interview を開発したのが、レドル（Fritz Redl : 1902-1988）とワインマン（David Wineman : 1916-1995）である。レドルは、オーストリアに生まれ、ウィーン大学において心理学と教育学を学び、その後、大学院にて博士号を取得した。また、アンナ・フロイト（Anna Freud）とオーガスト・アイヒホルン（August Aichhorn）に師事し、ウィーン精神分析研究所で訓練を受けている。1936年に渡米した後、戦争の影響もあり、1938年にはアメリカに在住することになった。その後は、ウェイン大学（現・ウェイン州立大学）などで大学教員として生活することとなった。

ワインマンは、デトロイトに生まれ、ウェイン大学卒業後、ミシガン大学大学院でソーシャルワーク修士の学位を取得している(安藤, 2018)。そのレドルらが取り組んだのが、1946年に始めたパイオニア・ハウスという実験的な治療施設である。レドルは施設運営全体を統括し、ワインマンは施設長を務めた。その実験的な施設での実践を経て、両名によって著されたのが“Children Who Hate”(1951)と“Controls from Within”(1952)である。また、その実践のなかで、レドルとワインマンによってLife Space Interviewは開発されたという経緯がある。なお、レドルとワインマンのものを、以下、The LSIと表記する。

レドルは、The LSIに関連する著作をいくつも書いているが、1950年代から1960年代の主な著書は表1の通りである。

表1 The LSIに関するレドルの主な著書一覧

著者名	出版年	著書名
Redl, F. & Wineman, D.	1951	Children Who Hate
Redl, F. & Wineman, D.	1952	Controls from Within
Redl, F. & Wineman, D.	1958	The Aggressive Child
Rexford, E. & Redl, F.	1959	Strategy and techniques of the life space interview
Redl, F.	1959	The concept of a "therapeutic milieu"
Wineman, D.	1959	The life-space interview
Redl, F.	1966	When We Deal with Children

安藤(2012)より一部修正し再掲

The LSIの注目すべき点は、面接の構造を、従来の面接室での面接から、面接室だけでなく生活場面全体へと変更したことである。レドルが変更した面接構造はそれだけではない。伝統的な精神分析学や自我心理学を学びながらも、面接室で過去のことを扱う面接という面接構造も変更したのである。パイオニア・ハウスでの実践を基盤とし、ワインマンとともに、「生活の場」のなかで面接が「必要な時」に「その場」で実施するという面接構造をもつ面接方法を開発したことにある(安藤, 2012, 2018)。

その後、レドル(1966)は、パイオニア・ハウスでの情緒障害児での実践を基にして、学校教育のなかで情緒的な問題を抱える児童・生徒へと、The LSIの対象を拡大した。その流れを汲んだのが、ロング(Long, N.J.)とウッド(Wood, M.M.)である。ロングら(1991)は、The LSIを「危機介入」という視点から掘り下げ、Life Space Interventionを提唱した。のちにLife Space

Crisis Intervention(以下LSCIとする)へと深化させた。ロングらは、LSCIを研修教材のパッケージとしても開発した。その研修の対象は、教師をはじめ、児童・生徒にかかわる職種であり、その研修を組織的に提供している(LSCI Institute)。LSCIの研修の組織的な提供は、現在に至っても継続されている。

日本においては、青木(1957)が『非行少年』のなかで、レドルが開発した面接技法を断片的に伝えている。その後、“Children Who Hate”(1951)の翻訳書として『憎しみの子ら』が1975年に出版された。しかし、その後、レドルらの著作を翻訳した書籍は出版されていない。1990年代、The LSIが日本で再度脚光を浴びたのは、ソーシャルワークの研究者である久保(1991)によって「構造化されていない面接—生活場面面接の視点から」が発表された後である。1998年には『ソーシャルワーク研究』誌において特集が生まれ、その影響もあってか、「生活場面面接」という用語は、社会福祉分野を中心に広まっていった。

実際、「生活場面面接」という用語は、様々な分野や種別で使用されるようになってきている。CiNiiでの検索結果をもとに、「生活場面面接」と論文名に記載されているもののなかで、論文名で扱われている分野と種別を分類し整理すると表2のようになる。なお、施設種別は論文のタイトル等に使われている施設名称をそのまま記載している。

表2 分野と種別による分類

分野	施設種別(タイトル記載)
児童	児童養護施設
	児童自立支援施設
	母子生活支援施設
	一時保護所
	中学校
高齢者	高齢者ホームヘルプ
医療	総合病院

表2のように、児童分野では、児童養護施設(大月ら, 2017)、児童自立支援施設(大原ら, 2018)、児童相談所の一時保護所(大原ら, 2013)母子生活支援施設(細金, 1998)、中学校(安藤, 1998)が挙げられる。高齢者分野では高齢者ホームヘルプ(鳥末, 2005)が、医療分野では総合病院(松山, 1998)などが挙げられる。このように、様々な分野での研究も行われてきていて、ホームヘルパーへの啓蒙や研修も行われている(小嶋ら, 2013)。

上記のように、様々な分野において研究や実践が行われている生活場面面接であるが、その用語の使用については、必ずしも統一されていない現状がある。もともと「生活場面面接」は「Life Space Interview」の訳語として使用されてきたと考えられるが、必ずしも統一されているわけではない。また、「Life Space Interview」や「Life Space Crisis Intervention」との違いも明確にされぬまま、使用されている状況がある。例えば、大原（2016）は、そのタイトルに「生活場面面接（Life space Interview, Life space crisis intervention）」と示しており、「生活場面面接」を、The LSI（レドルら）とLSCI（ロングら）の2つの用語に共通した1つの訳語のように使用している。大原の3つを同一視する用語の使用は、その著書『感情や行動をコントロールできない子どもの理解と支援』（2019）にも見られる。また、小嶋ら（2015）『M-GTAによる生活場面面接研究の応用』では、ホームヘルプ実践での「生活場面面接」の起源をThe Life Space Interviewとしながらも、修正版グランデッド・セオリー・アプローチによるホームヘルプ実践の調査結果から、「生活場面面接」に“Life Situation Interview”という英語名をつけている。

なぜ、このような用語の混乱が生じるのかを筆者は考えてきたが、それは理論的な背景の理解が十分ではないためであると、考えている。筆者は過去にも、用語（訳語）の使い分けの重要性を論じたが、その時点では「生活場面面接」と「The Life Space Interview」の使い分けにとどまってきた（安藤，2012，2018，2021）。筆者としては「生活場面面接の歴史に関する研究」（安藤，2012）の執筆の段階でジェイムズ，A.B.（2008）がThe Life Space Interviewとレヴィン（Kurt Lewin）の生活空間（Life Space）との関連を論じている論文を発見していた。しかし、筆者自身がその関連性を明確に論じることができていなかったこと、その他の研究者もこの関連性を研究で明かすことができていないことも、用語や訳語の混乱の理由であると考えている。

生活場面面接に関する論文を見ると、その分類と内容について整理したもの（丸山，2006）はあるが、レドルの理論的な内容にまで説明が十分にされているものはない。このような現状のなか、今後の生活場面面接の発展のためには、その理論的な背景を明らかにし、より明確に「生活場面面接」と「The Life Space Interview」

の共通点と相違点を明確にする必要があると考える。その研究が、今後の生活場面面接の用語の使用や、研究を行う者たちへの混乱を取り除き、理論的に整理された理解をもたらすと考える。それは、実践現場で生活場面面接を実施しようとするサイコセラピストやソーシャルワーカーにとっても有益であると考えられる。

本研究の目的は、レドルのThe Life Space Interviewにおける理論的な背景を明確にすることである。しかし、生活場面面接に関する論文は、久保（1991）以降の論文はあるが、それ以前は論文がない。そのために、日本語における用語の表記の仕方を、1991年以前の『心理用語の基礎知識』、『誠信 心理学辞典』、『学術用語集 心理学編』の3つの辞典等を文献として調査し、整理する。また、The Life Space Interviewの理論的基盤の1つとなる場の理論から、生活空間について考察することである。なお、1990年以降に出版されている社会福祉分野の用語集で「生活場面面接」の記載がある『社会福祉士・介護福祉士のための用語集』を、1991年以前のものとの参考にするために、文献研究の対象として取り扱っている。

## 2. 調査方法

この研究は、文献研究による研究である。国内の「生活場面面接」を扱った研究論文では、1991年以前の論文は、CiNiiで検索しても出てこない。そのため、「生活場面面接」を項目にもつ数少ない辞典等を対象に行なった文献研究となる。

- (1) 辞典等の文献から“Life Space Interview”に関する訳語を整理する。
- (2) その辞典等の文献に記述されている内容を整理する。
- (3) レヴィンの『社会科学における場の理論』を対象とし、「生活空間」についての記述を選出する。

なお、調査対象とする文献は、国内の書籍等を中心とする。

## 3. 結果

### (1) 辞典等による表記と記載事項

心理学に関する辞典等の場合、用語そのものが掲載されていないものがある。用語（訳語）が確認された4つの書籍のなかで、表3のような用語の記載と出版年等が確認できた。

表3 用語（訳語）一覧

用語（訳語）	書籍名	出版社	出版年
生活場面面接	心理用語の基礎知識	有斐閣	1973年
生活場面面接	誠信 心理学辞典	誠信書房	1981年
生活空間面接	学術用語集 心理学編	日本学術振興会	1986年
生活場面面接	社会福祉士・介護福祉士のための用語集	誠信書房	1997年

『学術用語集 心理学編』では、対象とした4つの資料のなかでは1つだけ「生活空間面接」となっている。本書には、用語の説明はないが、文部省（1986年当時）と日本心理学会が著作権をもっている学術用語集である。

(2) 取り上げた文献における説明の相違

また、取り上げた4つのうち、『学術用語集・心理学編』には、用語のみが記載されていて説明文は存在しない。そのため、3つの辞典等の説明文を引用すると、以下のようなものである。

F. レドルは、生活環境の中で、情緒的な問題をその場で扱う方法として、Life Space Interview を提唱している。たとえば、施設内で仲間の患者にひどくいじめられて泣いていたり、喧嘩したりしているとき、激しさが鎮まったところで、心理学者が患者に情動的な応急手当をして、このような事態をもっとありのままに理解するように援助し、このようなことになった時の自分の行動がどんなものであったかを発見させる。この方法は、次の治療期間まで待つより効果的である。

出典：『心理用語の基礎知識』

レドル [Redl,F.] によって主張された心理療法で、治療室における治療ではなく、現実生活の中に治療的価値をもつ心理的過程を発見し、それを利用しようとするもの。心理療法の立場からいえば、その初期の段階、すなわち、抵抗の治療に重点をおき、自分からの行動を統制することができるように働きかけるものである。

出典：『誠信 心理学辞典』

従来、福祉や臨床心理など人間援助において「面接」というとき、特別に時間と場所を確保して実施されるもの（構造化された面接）のみをさすことが多かった。しかし、病院や施設、学校などといった

援助の「場」は生活の場でもある。そこで生じた問題を、「後日別な場所で面接しましょう」と後回しにするわけにはいかない。そこで、今までワーカーがあまり重要視してこなかったクライアントの日常生活の場を面接空間として認めていこうとするもの。

出典：『社会福祉士・介護福祉士のための用語集』

これら3つの辞典等に記載されている説明を、生活場面面接の開発者である①レドルの名前、②英語名、③実施する場、④実施者、⑤ The LSI の対象、⑥ The LSI の目的、⑦ The LSI の内容について整理したものが、表4である。

表4 説明の整理

	心理用語の基礎知識	誠信 心理学辞典	社会福祉士・介護福祉士のための用語集
①レドルの名	F. レドル	レドル [Redl,F.]	なし
②英語名	Life Space Interview	なし	なし
③実施する場	生活環境の中	現実生活の中	(日常) 生活の場
④実施者	心理学者	なし	ワーカー
⑤ The LSI の対象	施設内の患者	なし	クライアント
⑥ The LSI の目的	情動的な応急手当	治療的価値をもつ心理的過程を発見し、それを利用しようとするもの(抵抗の治療に重点)	援助(面接)
⑦ The LSI の内容	このような事態をもっとありのままに理解するように援助し、このようなことになった時の自分の行動がどんなものであったかを発見させる	自分からの行動を統制することができるように働きかける	なし

(3) 『社会科学における場の理論』における「生活空間」の記述

猪股(1956/1979/2017)が翻訳した『社会科学における場の理論』は、初版から2度の再販が行われている。そのなかで、2017年に再販された書籍を文献研究の対象とした。その索引には、「生活空間」の掲載ページとして11のページが示されている。そのなかで、直接「生活空間」を説明している箇所を引用した。対象となったのは、3ページである。そのページ数が分かるように、引用の最後に括弧でページ数を記載した。

個体の“生活空間”の特性は、一部は個体の歴史の産物としての個体の状態に、他方では非心理学的—物理的ないし社会的—環境に依存する。後者の生活空間に対する関係は、力学的体系における“境界

条件”の関係と同様である。(p.65)

心理学的環境は機能的には、1つの相互依存的な場である生活空間の一部分と見なされるべきである。(中略)すなわち行動=人と環境の関数=生活空間の関数 ( $B = F(P, E) = F(LSp)$ )。したがって心理学的環境の不確定は、ある点で人の不確定を増大させる。ところで、“確定されている”ということは、高度に分化した生活空間の諸領域に対して、その位置が確立され、関係が一定していることを意味する。(p.139)

生活空間の構造というのは、その部分の位置的關係のことである。その構造は、生活空間のトポロジーによって表現されるであろう。人の移動すなわち一方の領域から他方の領域への位置の変化は、構造における変化の1つの類型と見られる。(p.250)

#### 4. 考察

##### (1) 訳語について

対象となった3つの資料によると、The Life Space Interviewの訳語としては「生活場面面接」のみが使用されていることが分かった。また、「生活空間面接」が使用されているのは、文部省(現・文部科学省)と日本心理学会が著作権をもつ学術用語集のみであることも分かった。

The LSIの訳語は、「生活場面面接」ではなく「生活空間面接」の使用が妥当であると考えられる。この根拠としては、ジェームズ、A.B.(2008)が指摘するように、レヴィンの場の理論における「生活空間」(Life Space)という概念を、レドルはThe LSIの実践の場に応用していることである。つまり、レドルのThe LSIは、レヴィンの場の理論における「生活空間」を理論的基盤の1つにしていると考えられる。レヴィンの“Life Space”の記述内容やその訳語に「生活空間」が使用されている事実からも、妥当性を確認できたと考える。その一方で、今回対象とした辞典類では“Life Space”の訳語に、なぜ「生活場面」を使用したのか、その理由は調査できていない。レヴィンとの理論的系譜を明確にするのであれば、The Life Space Interviewの訳語には「生活空間面接」を使用するのが妥当であろうと、筆者は考える。これはその訳語として「生活場面面接」を使用す

ることを否定しているわけではない。しかしながら、“Life Space”を「生活空間」ではなく、「生活場面」と訳す意味や意義を明記するべきではないかとも考えている。

##### (2) 説明について

対象となった4つの文献のうち、用語の説明が記載されている文献は3つである。その3つの辞典等における記述を整理したものが表4である。この表のように7項目において整理した結果から、共通点が2点、相違点が5点あることがわかった。

共通点の1つ目は、生活場面面接の提唱者がレドルであるという記載がされていることである。ただ、『社会福祉士・介護福祉士のための用語集』の「生活場面面接」の項目にはみられなかった。しかし、「生活場面ソーシャルワーク」という項目があり、「レドル(Redl, F.)らによって提唱された生活場面面接」との説明の記載がある。このことから、3つの資料で共通したものと判断している。共通点の2つ目は、生活場面面接を実施する場である。実施する場は、「生活」に関連する場で、実施するものであると記載されていることである。「生活環境の中」、「現実生活の中」、「(日常)生活の場」と表現は若干異なるが、日常生活と切り離された「面接室」ではない場所で実施されることが記載されている。

相違点のなかで、重要なものは「実施者」、「The LSIの対象」、「The LSIの目的」である。これらは、いずれもレドルのThe LSIが対象とする者とは違っている。レドルがThe LSIを開発した実験的治療環境であるパイオニア・ハウスでの取組がもとになっている。その当時、パイオニア・ハウスでは、心理学者であるレドルが全体を統括し、ソーシャルワーカーであるワインマンが館長、カウンセラーとして大学から実習生を迎えて配置している(安藤, 2018)。この事実から、The LSIの「実施者」は、「心理学者」、「ソーシャルワーカー」、「訓練を受けた大学の实習生」ということであり、The LSIはこれらの人が実施したことになる。その後、さらに「教育者」にまで研修を行っていることを考えれば、The LSIの研修を受けたものであれば、実施可能ということである。

また、「The LSIの対象」は、情緒障害のある子どもたちであった。それらの子どもたちはレドルらの基準に

よって選定された子どもたちである(安藤, 2018). パイオニア・ハウスで集団的な治療生活を送った子どもたちのなかで、長期に入所していた5名は、表5のような家族状況をもつ子どもたちである。

表5 パイオニア・ハウスの5人の子どもたちの家族状況.

名前	家族の状態	養育状況	父親	母親	きょうだい
ダニー	両親が離婚し母親と暮らす	父親から乱暴に扱われ、母親からは憎まれて育つ。母親から男性性をも否定される	アルコール中毒、酔うと家族に暴力をふるう。口汚い、性生活がルーズ	ダニーを夫と同一視し、夫の虐待にたいする敵意や両極感情をダニーに向ける	きょうだいの2番目、一人の弟以外みな女の子。同胞には絶大な憎しみをもつ
ラリー	慈善施設で出生し、3歳までその施設にいた。5歳までは里親や祖父の家で暮らす。6歳で母親・義理の父親と同居	義理の父親の乱暴の的になるだけでなく、母親の愛情も希薄な状態で育っている	実の父親は不明、母親が年上の男性と結婚した。アルコール中毒で、卑劣で残忍な性格、サディックな性向	未婚でラリーを産み、ラリーが6歳の時に結婚。虚弱な、受け身的でぼんやりした女性。息子に対しては非常に希薄な気持ち	きょうだいにたいして敵意のこもった憎しみをもち、ぼんやりしているが、誰も想像できないほどの激怒もみせる
アンディ	赤ん坊だった頃に母親が離婚し、施設や里親を転々としている	母親の死後に父親が引き取ったが、義母は拒否的態度で接し、自分の子には過保護である	再婚して3人の子をもうけていた。アンディに対して愛情を示すことはなかった	アンディが6歳のときに交通事故で亡くなったが、ほとんど接触することはない	自分のなかにある敵意をすべてきょうだいに向けていた。きょうだいへの嫉妬は慢性的であった
マイク	両親に養育されている	マイクの知る愛情関係は、父母がみせていた性的な関係のみである	母親とけんかをするのみならず、家に帰ると母親と性的な接触をし、またけんかの繰り返し	父親の酒癖のわるさを知らながらも性的な接触を受け入れて“仲直り”する	記載なし
ビル	両親に養育される。家族が離散していないため、里親にあずけられたこともない	パイオニア・ハウスの子どもたちのなかでは、比較的安定した家庭環境に育っている	記載はないが、父親がいないわけではない	兄弟がけんかをはじめると母親だけでは対処できない	兄に強い競争意識をもつ。家や学校、YMCAでも口げんかやとっくみあいをし、全体の秩序をみだす

安藤 (2018) より再掲

レドルが The LSI の対象とした子どもたちは、情緒障害をもつ子どもと表現されている。その上、表4からも分かる通り、ビルを除けば、家庭環境も難しく、児童虐待(心理的虐待、身体的虐待、ネグレクト、性的虐待)を受けている子どもたちであることが分かるであろう。

こういった背景をもち情緒的な障害をもつ子どもが対象であるが、3つの資料では、対象が違うだけではなく、その対象が「子ども」あるいは「児童」であるという記述がないことも分かる。しかしその理由は不明である。レドルは The LSI の使用を学校にも拡大している(レドル, 1963)ため、3つとも「児童・生徒」を対象として示しても良いが、その記述がない理由も不明である。

### (3)「生活空間」について

『社会科学における場の理論』において、「生活空間」に関するまとまった記述3ヶ所を抜き出すことができた。

これらを考察する前に、レヴィンについて触れておくことが必要であろう。サトウら(2023)によれば、レヴィンは体験を通して構造化される空間を「生活空間」とし、物理学から場理論の考えを導入し、境界、障壁、通路などの概念を使って、人間の行動を表そうとした。レヴィンは、心理学的な場理論であるトポロジー心理学を考え、集団内における個人の行動はその集団のエネルギー場によって影響を受けると考えるグループ・ダイナミックス(集団力学)を生み出した人物である。また、実践的方法であるアクション・リサーチを提唱したことも有名である。レヴィンが亡くなった後に、その著作を、カートライト(Dorwin Cartright)が編纂し1冊の書籍『社会科学における場の理論』として刊行されたのが、1951年である。このカートライトは、レヴィンのグループ・ダイナミックス(集団力動)の研究を引き継いだ人物でもある。

カートライトは、『社会科学における場の理論』のまえがきにて、場の理論と生活空間について書いている。「レヴィンにとって最も基本的な構成概念」は、「場」の概念であり、「すべての行動は、一定の時間単位における場のある状態の変化として考えられる」。「科学者が取り扱わなければならない場は個人の“生活空間”であ」り、「生活空間は、人とその人にとって現存する心理学的環境とからなっている」。

レヴィンの著作から抜き出した「生活空間」に関する記述や、カートライトの解説を読んでも、すぐに理解しにくいのが場の理論であろう。とくに、レヴィンの示した「行動=人と環境の関数=生活空間の関数(B=F(P,E)=F(LSp))」は、象徴的である。場の理論について、レヴィンは、一般的な理論へと「物理学で辿ろうとも結局場の理論へは到達しない」としながらも、「場の理論は方法としておそらく最もよく特徴づけることができる。すなわち因果関係を分析し、科学的構成概念を樹立する方法である」と説明している。

では、The LSI との関連性は、ジェイムズ, A.B.(2008)によって指摘されていることであるが、具体的にどう考えるかである。レヴィンの「生活空間」が体験を通して構造化される空間であると捉えたとき、レドル

の The LSI における "Life Space" との共通点が見出される。それは、子どもたちの日常生活体験として構造化される空間が "Life Space" であるという認識である。ただし、より明確な理論的なつながりは、レドルとレヴィン、双方の著作を丹念に掘り下げていくことが必要である。

#### (4) 全体的考察

今回の結果から、The LSI の訳語は、レヴィンの場の理論との関連性を重視するのであれば、「生活空間面接」と表記するのが妥当であることが分かった。これは、辞典等の3つの資料の検討結果からも導かれることである。3つの資料に記載された「生活場面面接」という訳語は、その説明部分からも、十分にレドルの The LSI を理解し反映しているものではないことが判明したからである。そして、レドルの "Life Space" とレヴィンの "Life Space" との関連性が確認できたことで、訳語「生活空間面接」の妥当性を裏付けられたことである。これは、専門用語として使用されている「生活場面面接」の起源を明確にし、その理論的背景を明確にできたことは、意義があるものである。理論的理解を踏まえた上で、「生活空間面接」と「生活場面面接」の用語を定義し使い分けをすることは、今後の研究上の用語（訳語）の定義の根拠を示すことができるという意味でも有意義である。

一方で、今回の結果から、新たな課題も明白になってきている。その1つが、辞典等に「生活場面面接」という訳語が採用されたことの解明である。もう1つが、辞典等の説明内容の混乱要因の解明である。レヴィンの『社会科学における場の理論』は、日本において、猪股(1956/2017)によって翻訳書として出版されている。また、『心理用語の基礎知識』が出版された時期(1973年)とジェイムズ, A. B. (2008) がレドルとレヴィンの理論的な繋がりを指摘をした時期とは30年以上の開きがある。『心理用語の基礎知識』が編纂された時期には、『社会科学における場の理論』は出版されていた。しかし、レドルとレヴィンの理論的な繋がりが意識されず、"Life Space" が「生活場面」と訳され、説明の不十分なまま使用されてきた可能性がある。これを仮説として、その検証をする研究が課題である。ちなみに、CiNii において「クルト・レヴィン」で検索される論文数は17(2023.08.31 現在)で、そのうち「生活空間」

がタイトルに含まれるものは山本(1956)と白井(2018)の2つのみである。この事実から、その検証は、資料の発見を含めて実現可能かを検討する必要性もある。

今回の研究では生活場面面接を扱った辞典等を対象としたが、今後の研究では、レドルとレヴィンの理論的な繋がりを示す実践を丁寧に探し出し、研究していくことが大きな課題である。この大きな課題に取り組むことが、The LSI の理解に寄与し、生活場面面接の研究にも寄与するであろうことが考えられる。さらに、久保が提唱した「生活場面面接」に対して理論的背景をより明確にし、The LSI や LSCI との違いを明確にしながら、その独自性を研究することが大きな課題である。生活場面面接として、面接室以外で行われる面接の意義を明確にする研究は、レヴィンの「よい理論ほど、実践的なものはない」という名言を証明することにもなり、対人援助の専門職として面接を技法として用いる人々に貢献するものと考えられる。

#### 参考文献

- James, A.B. (2008) ROOTS: The Life Space Pioneers. *Reclaiming Children and Youth*, 17 (2), 4-10.
- Redl, Flitz. (1966) When We Deal with Children. Free Press.
- Redl, Flitz. and Bernstein, M. (1963) The life space interview in the school setting—Workshop, 1961: 1. Life space interview in the school setting. *American Journal of Orthopsychiatry*, 33 (4), 717-719.
- Redl, Flitz. and Wineman, David. (1951) Children Who Hate. Free Press. (= 1975, 大野愛子・田中幸子訳, 外林大作監 (1975) 『憎しみの子ら—行動統制の障害』全国社会福祉協議会.)
- Redl, Flitz. and Wineman, David. (1952) Controls from Within. Free Press.
- Redl, Flitz. and Wineman, David. (1958) The Aggressive Child. Free Press.
- Lewin, Kurt. (1951) Field Theory in Social Science. Harper & Brothers. (= 2017, 猪俣佐登留訳 『社会科学における場の理論』ちとせプレス.)
- Long, N.J. & Wood, M.M. & Fecser, F. (2001) Life Space Crisis Intervention. Pro-Ed.
- Morse, William C. ed. (1991) Crisis Intervention in Residential Treatment: The Clinical Innovations of Fritz Redl. The Haworth Press.
- Morse, William C. (2001) A half century of children who hate: Insights for today from Fritz Redl. *Reclaiming Children and Youth* 10 (2), 75-78.

- Smith, L.M. (2004) A Retrospective Review of the Aggressive Child: An Early and Major Exemplar of Qualitative Inquiry, *Qualitative Social Work* 3 (2), 221-231.
- Whittaker, J K. and Trieschman, A E. eds. (2009) *Children Away from Home*, Routledge.
- Wicker.Allan.W. (1984) *An Introduction To Ecological Psychology*. Cambridge University Press. (= 1994, 安藤延男監訳『生態学的心理学入門』九州大学出版会.)
- Wineman, D. (1959) *The Life-Space Interview*, *Social Work* 4 (1), 3-17.
- Wineman, D. (1991) *Fritz Redl: Matchmaker to Child and Environment - A Retrospective*, Morse, William C. ed.(2016) *Crisis Intervention in Residential Treatment: The Clinical Innovations of Fritz Redl*. Routledge, 31-42.
- Wood, M.M. & Long, N.J. (1991) *Life Space Intervention*. Pro-Ed.
- 青木延春 (1957)『*非行少年*』全社協.
- 東洋, 大山正, 詫摩武俊ら編 (1973)『*心理用語の基礎知識*』有斐閣.
- 安藤健一 (1998)「中学校の相談室での生活場面面接—相談ではないA君とのかかわり」(特集:生活場面面接)『*ソーシャルワーク研究*』相川書房, 24 (3), 191-195.
- 安藤健一 (2001)「生活場面面接と面接構造」『*立正社会福祉学研究*』(立正大学社会福祉学会) 2, 89-93.
- 安藤健一 (2008)「保育ソーシャルワークに関する一考察—保育士による生活場面面接の可能性」『*清泉女学院短期大学研究紀要*』27, 1-11.
- 安藤健一 (2009)「保育士養成課程における保育ソーシャルワークの可能性—生活場面面接への展開過程」『*清泉女学院短期大学研究紀要*』28, 1-11.
- 安藤健一 (2012)「生活場面面接の歴史に関する研究」『*清泉女学院短期大学研究紀要*』30, 1-10.
- 安藤健一 (2018)「生活場面面接の再考:『*憎しみの子ら*』を中心とした考察」『*日本福祉大学社会福祉論集*』138, 47-61.
- 安藤健一 (2021)「研究ノート デイヴィッド・ワインマン: レドルと面接技法をつくったソーシャルワーカー」『*日本福祉大学社会福祉論集*』145, 41-53.
- 大原天青 (2016)「生活場面面接 (Life space Interview, Life space crisis intervention) に関する研究動向と課題: 諸外国と日本の比較を通して」『*上智大学社会福祉研究*』40, 53-80.
- 大原天青 (2019)『*感情や行動をコントロールできない子どもの理解と支援: 児童自立支援施設の実践モデル*』金子書房.
- 久保紘章 (1991)「構造化されていない面接」『*ソーシャルワーク研究*』相川書房, 16 (4).
- 久保紘章ほか (1998)「特集:生活場面面接」『*ソーシャルワーク研究*』相川書房, 24 (3).
- 小嶋章吾, 寫末憲子 (2015)『*M-GTAによる生活場面面接研究の応用—実践・研究・教育をつなぐ理論*』ハーベスト社.
- サトウタツヤ (2021)『*臨床心理学史*』東京大学出版会.
- サトウタツヤ (2022)『*臨床心理学小史*』筑摩書房.
- サトウタツヤ, 高砂美樹 (2022)『*流れを読む心理学史 増補版*』有斐閣.
- 寫末憲子, 小嶋章吾 (2005)「高齢者ホームヘルプ実践における生活場面面接の研究: M-GTA (修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ) を用いた利用者の「持てる力を高める」プロセスの検討」『*介護福祉学*』12 (1), 105-117.
- 白井利明 (2018)「クルト・レヴィンにとって時間的展望とは何か—ダイナミック・システムズ・アプローチとしての生活空間論」大阪教育大学紀要『*総合教育科学*』66, 75-94.
- 全国教護院協議会編 (1985)『*教護院ハンドブック*』三和書房.
- 全国児童自立支援施設協議会編 (1999)『*新訂版 児童自立支援施設 (旧教護院) 運営ハンドブック*』三学出版.
- 外林大作, 辻正三, 島津一夫ら編 (1981)『*誠信 心理学辞典*』誠信書房.
- 古川孝順, 定藤丈弘, 川村佐和子編 (1997)『*社会福祉士・介護福祉士のための用語集*』誠信書房.
- 山本英治 (1955)「クルト・レヴィンの「生活空間」の構造」*富山大学紀要『経済学部論集』*, 6, 159-167.